

栗山雄佑著 『〈怒り〉の文学化——近現代日本文学から〈沖繩〉を考える』

テグスト

加島 正浩

本書は、米軍や日本政府が沖繩に対して行う加害行為、あるいは加害に対する抵抗としての〈暴力〉行為を俎上に上げること、〈暴力〉的行動に頼らず加害行為に対峙する方法を思索した著作と言える。まずは、各章の梗概を述べることで本書が焦点化している問題を整理したい。

第一章では、又吉栄喜「ギンネム屋敷」が分析の対象となる。ここでは戦争被害者でもあり、沖繩の女性に性暴力を行った加害者でもある「朝鮮人のエンジニア」が中心に分析される。加害と被害が重層化し、統一的な自己像を持つことができないエンジニアを取り巻く「わけのわからん」事象を描くテクストを〈戦時性暴力〉、〈沖繩戦の記憶伝承〉、〈沖繩文学〉などの安易なカテゴリーに幽閉することの〈暴力性〉がここでは問われている。

第二章では、又吉栄喜「ジョージが射殺した猪」が分析される。ここでは米軍兵士のジョージが、沖繩の女性への性〈暴力〉によって沖繩を身近に感じるのはなく、米軍兵士に求められる規範に

沿うことができない自らの〈痛み〉の共有によって、コミュニケーションの回路が開き得た可能性を提示する。

第三章では、目取真俊「平和通りと名付けられた街を歩いて」が分析の俎上にあがる。ここでは作中で描かれる、皇族や天皇制に対するテロルという〈暴力〉を評価する言葉の裏で不可視化される人々の苦悩が浮き彫りにされる。

第四章では、一九九五年九月四日に起こった沖繩米兵少女暴行事件に関する文学者の反応が、まず整理される。日野啓三をはじめとした本土の文学者が沖繩をオリエンタリズム的にまなざし、政治と文学の問題に事件を収斂させていくのに対し、それを裏切るように書かれた崎山麻夫「闇の向こうへ」、下地芳子「アメリカタンポポ」が分析される。ここでは、事件が反基地運動や日米安保改定などの政治問題にスライドさせられることで〈性暴力〉の問題が後景化させられていることが指摘され、継続する〈暴力〉の連鎖のなかでいかに生を紡いでいけるのか、という問いが提起される。

その問いは、第五章の目取真俊の「希望」の分析に引き継がれる。

第五章では、米軍兵士による少女への（性暴力）を受けた主人公の（対抗暴力）としてのテロ行為を少女の被害に対する思索、応答行為を放棄したものと位置づけ、批判する。そのうえで、作中の人物たちの行為から（非暴力）の意志を見出し、（痛み）を被っている人間への想起によって、対抗暴力によらない（希望）を見出すと試みている。

第六章では目取真俊の「虹の鳥」が分析の対象となる。本章でも沖繩の現状を訴え変革を求める際、あるいは言葉では表現できない怒りを表現する際に、（暴力）が不可欠とされることへの疑義がまず提示される。そのうえで（暴力）が現状の変革に有効であると捉える考えを打ち破る方法として、（暴力）行為のために後景化された（声）があることに着眼する。そして栗山は、そのような痛ましい「小さな声」に暴力の連鎖を断ち切る話し合いの場を構築する可能性を見出している。

第七章では目取真俊の「水滴」が分析され、第八章では同じく目取真の「群蝶の木」が分析の対象となり、「戦時記憶の共有」が問い直される。戦時性（暴力）の傷を安易に理解可能なものとして描くことは、代理表象の（暴力）を招きかねず、理解可能な傷のみを取り上げ、その他を（ノイズ）として排除する（暴力）を発動させかねない。そのため栗山は、言語化不可能な身体的な違和感に着眼する。言語化できない「わからなさ」を抱えつつけることで、他者／過去の問題を、自ら／現在の問題として引き受けつつける回路が開けるのではないかと栗山は分析するのである。

第九章では崎山多美「月や、あらん」が分析の対象となり、言語化／テクスト化される際に捨象される（ノイズ）が焦点化される。

栗山は文字化されえない発信者の記憶や感覚の（ノイズ）を解釈者の認識や身体を変容させていく可能性を有するものとして読み解く。解釈困難な過去の証言それ自体は変わらなくとも、解釈する側が変容することで、（ノイズ）としか解釈できなかったものを「読める」ようになる可能性が生じる。（ノイズ）を表象可能なものにするこの不可能性を認めながら（認められるようになるがゆえに）（ノイズ）と解されてきた証言へと接近していける可能性を、栗山は見出していくのである。

そして第一〇章では、目取真俊「目の奥の森」が扱われ、意味内容を有さないとされる「悲鳴」や「叫び声」を、少女の（痛み）を表象する（声）として安易な理解に落とし込まずに、いかに応答できるのかという問いが設定される。性（暴力）や軍事的な（暴力）にさらされ続ける沖繩では、被害者の声を「引き受ける」かのように（暴力）的な報復が表象されてきた。栗山はそのような（暴力）的な報復行為を（声）の搾取であると批判する。そのうえで被害者が、（声）を搾取されることで、報復的な（暴力）行為を呼び込んでしまうために——それは実現困難であるかもしれない、（暴力）を被る生を受忍せよという観点を呼び込むかもしれないと前置きしたうえで——少女は「幸せに」「生きないといけない」「屍体」の状態を生きていることを「止めなければいけない」と結論づけている。

以上、論者の観点による暴力的な梗概となってしまうが、ここから本書が透徹した論理によって貫かれていることはわかるだろう。徹底した（暴力）行為の拒否というのが、それである。まず、その（暴力）は当然、沖繩に対して振るわれる複数の行為を指している。

沖繩に米軍基地を設置している日米両政府、アメリカ力軍人による性（暴力）などがそれにあたる。加えて栗山は、両政府やアメリカ軍に対して（暴力）で報復する（対抗暴力）を否定し、（暴力）によらない（希望）の回路を開こうとする。そのためには、（暴力）によつて被害者が負った傷を、あるいは沖繩が置かれている現状を、一定の枠組みのなかで捉え、理解可能なものとすることも問題である。それは（対抗暴力）でしか、被害の回復はなされず、現状を打開できないとする「理解」を否定できないからである。あくまでもそのような「理解」の前にとどまるために、栗山は、何を意味しているのか注意しなければ看過されてしまう（わからない）言語化不可能な要素（身体的な動きであり、「叫び声」であり、ノイズ）であり……）に着眼し、それを受け取ることで「わたしたち」が変化していく可能性に賭けている。

（わからない）ものを（わからないまま）抱え込み、それを考えつづけることで「わたしたち」は変化していくことができる。（わからない）ものは、（わからない）ものであり続けながら、受け手側に何らかの違和感（情動）を与え続ける。それを「理解可能なもの」に落とし込まず、解釈の枠組みを揺さぶり続けるものとして保持しつづける重要性を栗山は訴えているように思える。それは未決の問いに、解答らしきものをあてがうのではなく、内側に問いを抱えつづけるということでもあるだろう。

未だ現実には複数の（暴力）が折り重なった状態にあり、さらなる（暴力）が加えられつづけてもいる。現実がそうである以上、「文学」が（暴力）的な現実を一挙に解決するような答えを有しているわけではない。答えが提示されたようにみえるとき、そこには単純

化の（暴力）が働いており、言語化できないもの、理解されないものが（ノイズ）として排斥されている。栗山が試みようとしたのは、現実の諸問題に対する解決策を出すことではなく、これまでに「何が」（暴力的に）排除されてきたのかを明らかにし、それを読み取ることでできる身体を構築しなおすことであろう。

「わたしたち」は、変わっていくことができる。そして、変わっていくことのできる「わたしたち」が未決の問題に向けて新たに向き合いはじめること。そして新たに書きはじめること。そのことが、本書の提示する（希望）なのであろう。それは、すでに文字化されたものだけではなく、新たに生み出されるであろう「文学」にも向けて開かれている（希望）でもあるように、私には思えるのだ。

（二〇二三年三月二五日 春風社 四四三頁 四二〇〇円＋税）